

第50回科学技術映像祭審査講評（武部俊一）

科学技術週間とともに始まったこの映像祭も今年で50回を刻んだ。それを記念して各界の25人が寄せた「私が選ぶ科学技術映像ベスト5」には、映像祭の入賞作品を中心に80点にのぼる作品が取り上げられた。そのリストを見ると、半世紀の科学技術映像の豊かな蓄積と多様性を感じる。

その中でも人気を集めたのは『DNAが描くオサムシ新地図 ー進化の新しい原理を探るー』（JT生命誌研究館企画、ドキュメンタリー工房製作）と『BSドキュメンタリー 史上空前の論文捏造（ねつぞう）』（NHK企画・製作）で、5人の選者がベスト5にあげた。『7000人のカルテ ー九州大学医学部と久山町民の40年ー』（ライフサイエンス出版・日本科学映像協会企画、TVQ九州放送製作）と『細胞性粘菌の行動と分化 ー解明された土壌の生態ー』（樋口生物科学研究所企画、シネ・ドキュメント製作）

は4人が選んでいた。自然界のふしぎを写しとる。科学が投げかける社会問題の追跡をする。科学映像に寄せられてきた期待に見事に応えた作品だった。

第50回は60機関から76本の応募があった。今回もナノテクの世界から月世界まで、数学の美から染物の技まで、多彩な映像が展開され、楽しいうちにも、あれこれ惑いの審査作業だった。

討議を重ねた結果、最優秀作品（内閣総理大臣賞）には、国境を超える大気汚染問題を追跡報道したテレビ番組『黒い樹氷 ～自然からの警告～』（RKB毎日放送）を選んだ。屋久島の冬山を飾る樹氷を解かすと真黒な液と

なる。この驚きから発して、中国大陸からの黄砂が運んでくる汚染物質の正体に迫る。光化学スモッグや花粉症など地域的な環境・健康問題を追う中で、近隣の中国や韓国へ取材を広げ、国際的に対策に当たる人々の姿を描く視野の大きさが高く評価された。前年、救急・移植医療番組『命をつなぐ』で最優秀賞を受けた北海道放送に続いて、地方局がよく健闘している。

今回、最後まで最優秀を競ったのは、『本多静六 ～いのちを育てる森の実学～』（紀伊國屋書店企画、ポルケ製作）で、文部科学大臣賞に選ばれた。ビデオ評伝「学問と情熱」シリーズの第35巻で、第46回の『寺田寅彦』に次ぐ入賞。明治神宮の森や日比谷公園の造成で知られる明治の林学者のスケールの大きい人間像を描く。

このほか文部科学大臣賞に5本。『日常にひそむ数理曲線』（ベネッセ教育研究開発センターなど企画、ユーフラテス製作）は、楽しい教育映像だった。中高生たちが身近な風景に数学を発見することをねらっているが、数式と曲線の関係をもう少し突っ込んで説明してもよかった。『マインド・ラボ』（科学技術振興機構企画、ウイリアライアンス製作）は、インターネットを通して錯覚や思い込みを体験しながら、視覚現象のふしぎを探る。マルチメディア部門の映像の将来性を期待させる作品だった。

『未知の世界をうつす新しい光』（理化学研究所企画、日テレアックスオン製作）は、光と電波の間の忘れられていた境界領域にあるテラヘルツ光の探究。『器官の再生メカニズムを解く』（科学技術振興機構企画、NHK情報ネットワーク製作）は、器官形成誘導因子「アクチビン」

の発見者、浅島誠・東大教授による再生医学。いずれも最先端の研究プロジェクトをくぐり映像化した。

NHKスペシャル『雨の物語～大台ヶ原 日本一の大雨を撮る～』には、「NHKの力量をもってすれば、これくらいは当然」という辛い評価もあったが、新鋭の高速カメラでとらえた大粒の水滴のクローズアップ動画には目を見張った。

これと対照的に、映像技法は未熟だが、発信意欲を買われたのが個人製作の『よみがえる京大サイクロトロン』（中尾麻伊香）で、ポピュラーサイエンスの部門優秀賞に選ばれた。京大に残っていた戦中のサイクロトロンの調査や米国の原爆博物館の取材などを通して、原爆開発の真相を探る。迷いながらも、映像製作を通して歴史を発掘しようとする若い科学史研究者の姿勢が新鮮だった。

部門優秀賞にはこのほか、ポピュラーサイエンス部門で『技の彩#12 鼠・江戸小紋』（日テレアックスオン）と『だまし絵立体』（イメージサイエンス）、科学技術部門で『ヒートアイランド都市を救う 風の道』（日映科学映画製作所）と『遙かなる月へ～月周回衛星「かぐや」の軌跡～』（日本宇宙フォーラム）、科学教育部門で『自然がつくる色の世界』（映像館）、基礎研究部門で『ようこそナノテクの世界へ』（イメージサイエンス）、医学部門で『骨の強さを生む！コラーゲン架橋』（桜映画社）が入選した。

今年の15本を含めた50回の入選作品634本の総覧は、日本科学技術振興財団発行の冊子『私が選ぶ科学技術映像ベスト5』の巻末に収録されている。アーカイブに保存されている作品が、できるだけ多く利用されることが、製

作者の苦勞に報いることになる。50周年のこの機に利用システムが整うことを願う。